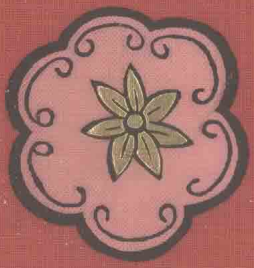

中里恒子全集

中里恒子全集　第十三巻
定価二〇〇〇円
昭和五十四年十一月十五日印刷
昭和五十四年十一月二十五日発行
著者　中里恒子
発行者　高梨　茂
印刷者　青木　勇
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ八ノ七
電話(五六一)五九二一
振替東京二―三四
検印廃止
©一九七九

目次

ダイヤモンドの針　3
うしろ髪　255
関の戸　283
ふるさとは要らない　309
旅びと　339
あとがき　369
解題　370

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ダイヤモンドの針

目次

ダイヤモンドの針　5
箱の中　48
坂道　107
背水の日　152
傘の雪　217

ダイヤモンドの針

徳四郎は妻の万佐子を、なにかと言えば、ばか正直のわからずやと言う。それは、そうであるのが女らしく愛しいと思っているような言い方なのである。

「お姉さんはうるさいひとなんだ、中将の娘で、頭はいいし、嫁入りの時は、里から小間使いも連れてきて……そんなひとだから、あんたの衣裳にまで口を出すのさ、だから、その通りのものを作ればいいじゃあないか、」

「いいえ、あたくしは、曖昧な色合いはきらいなの、自分の色を着たいの、」

「たった一日のことだろう、いいじゃないか、」

「クリーム色の紋付なんて、いやだってはっきり申し上げたら、じろっと、にらんだわよ、」

「無神経にそんなことが言えるね、意地わるされるぜ、僕なんか、頭があがらないんだ、」

「……とくしろさんは、学生時代ずいぶん不良だったんですってね、おふみから聞いたわ、お姉さんがそれでも、かばって下さったんですってね、そんなに、もの堅いかたが……」

「おふみの言うことなんか、でたらめだよ、婆やは、お姉さんが嫁に来る二十五年も前からうちにいるんだ、お母さまより威張ってるくらい頑固だし、お姉さんは煙たいのさ、その婆やの、僕は秘蔵っ子だから、僕の肩をもっていれば、婆やの機嫌がよくてやりいいからだろう……三すくみって言うのかな、」

「へんなうちね、あたくしは、お姉さんのところへお嫁にきたわけではないのですもの、紋付の色がどうの、帯がいけないのって言われると……そうやって、だんだん別の人間に作り変えられてしまうような気がするの、」

「ばかだよ、はいはい言ってればいいんだ、その方が、とくじゃないか、」

万佐子は、意外に思った、とくしろさんでも、とくな方につく。きくと見るとは既に違っていた。好人物の無慾の、酒は飲まない、遊びは知らない、坊っちゃんには珍らしい君子ときかされた。万佐子は、そんな人柄よりも、酒は飲んでもいい、但し酔っぱらいは困る、無慾なんてつまらない、慾張りの方が人間らしい、あたくしも聖女にはなれそうもありません、と、いわゆるばか正直に話した。

だが、そんなことに落胆したのではない。のら猫が、いつも庭に坐りこんでいる、あれは、子猫を産むつもりなんだ、僕は、猫と蛇は大嫌いだ、猫は追っても駄目だ、撃ってやろうと言い出した。

「あたくしだって猫はきらい……だけど殺したりしないで、」

しかし、晩春の夕方、ぎゃっと言う悲鳴をあげて、反対に、家の中へ飛びこんで来た女猫を追

って、徳四郎は、空気銃を撃ち続けた。猫は壁のそばで倒れた。
万佐子は、耳をふさいで部屋に逃げこんだ。女中のなつが、死なない猫を言いつけ通りにくるんで、何處かへ捨てにいった。
「いくら嫌いでも、あたくしは、こんなにまでしないわ、」
徳四郎は笑っていた。しゃぼんで手を洗って、新聞を読んでいる。食事が済んだら散歩にゆこうと言う。今したことに、なんの関心もない。その場かぎりなのだ。
なにか違う。はっきりどうこう言えないもどかしさのほかに、生きているというものの考え方が違う。万佐子は、ことごとに、何かが剝がれてゆくような、虚飾の思いにとらわれた。ジッドの「女の学校」を、地でゆくような気がする。
それは直感的に、動物的に、万佐子がそう思っているだけである。
世間でも周囲でも、徳四郎は、育ちも毛並もいい、友人にも寛容な人物だが、万佐子は、身分という言い方をすれば、嫁は下から貰えという譬え通り、徳四郎の身分よりわるいのに、すこし我がまますぎはしないか、という軽視があるのを、万佐子は、うすうす知っていた。身分という言葉の生きていた大正の初めに、官界、財界で巾を利かせた徳四郎の父親は歿して、あとは、その七光りで暮しているにすぎない家系だが、リンカーンの車があって、運轉手がいて、という様式に、まだ、人びとは身分を重んじていた。
「リンカーンって、大きな車、凄いのね、」
「……シボレーでも買うか、」

「……あたくしたちに必要ないと思うわ、」
「君のかねで買うのじゃあないよ、」
「それはそうですけれど、そんなもの……」
徳四郎の性質は、俗に外づらがよく、内づらがわるいというあれなのだが、それは朝から晩まで、身近にいる人間以外にはわからない。
魚の焼き方がわるい、酢のものが酸っぱすぎる、たったそれだけのこと位でも、万佐子がおいしそうに食べているのを見て、うす笑いをする、無視した声音で言う。
「こんなものが食べられるのか、僕は食べたことがない、」
「そう、あたくしはおいしいわ、とっても、」
「魚を焼きなおしなさい、」
「あら、よぶんのはないわ、鮭ならば、北海道から届いたのがありますけれど……」
「鮭を焼くのなんか、料理じゃないよ、」
「……」
「海老のコキールを作るとか、ホワイトソースぐらい出来ないのか、」
万佐子は、ぷんとして言った。
「あたくし、コックのようなお料理習ったことないの、うちでするのを見ていただけ、第一、うちには、料理番なんておりませんでしたから、食べられなければ、御本家へいって、料理番でも、婆やにでも、作っておもらいになってよ、」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「……」

徳四郎は、立ちあがると、座敷の卓子をもちあげて、軽軽と、庭の敷石へ叩きつけた。そうするまでに、皿小鉢は飛んで、襖や障子に当った。

万佐子は、ぽかんとそれを見ていた。猫のことを思い出した。それから急に恐怖に震えて、いきなり二階へ駈け上ると、扉をしめて鍵をかけた。

とんとんと、梯子段を上って来る。

「出ておいでよ、わるかったよ、」

徳四郎はそう言った。しかし万佐子は、恐怖で、がちがちしながら言った。

「そばへ来たら、あたくし、二階から飛び下りるわよ、死んでもいい、」

「なに言ってる……ばかだから、なにするかわからない……」

「そうよ、なにするかわからないわよ、」

万佐子は、着替えもせず、ぽつんと二階の寝台に腰かけていた。また、とんとんと、下りてゆく音がする。

止っていた虫の音が、再び響き出した。蟋蟀が部屋の隅にじっとしていた。万佐子は、たった一匹の蟋蟀が自分といっしょにいるというだけで、それだけで心丈夫に覚える。こんな虫一匹が頼りになるような、今までの自分とは何か違うものに馴れてゆく、そして、なんの疑念もなくなる……

万佐子のうちに昔奉公した女が、時時、母のところへ来て、亭主の不始末を訴えていた。酒乱

で、金使いが荒くて、女房の着物まで売り飛ばしてしまうといって、浴衣の重ね着で、台所に坐っていた。
「どうしても、もう別れます、別れましたら、こちらさまへ置いて下さい、ほかにゆくところはございません、」
　すると母は言う。
「いいよ、ほんとに別れられるなら、だけど、おはるさん、何度も何度も、別れると言っても、別れられないじゃありませんか、それは結構なことですよ、だったら、黙って辛棒おしなさいよ、」
「申しわけございません、お酒を飲まないときは、嘘のようにいいひとなんです……」
　万佐子は、学校から帰って、はるという女が、また来ているのを、不快にさえ思ったことがある。
「ね、どうしておはるさんは、そんなわるい良人といっしょにいるの……」
「そんなこと、子供の言うことじゃありません、あれは別れる別れると、うちへ言いつけに来るだけなの、それでいいの、」
　万佐子は、ふっと、その女のやつれた顔を思いうかべる。そして、母から衣類を貰って、元気づいて風呂敷包みを抱えてゆく姿も思い出された。
　徳四郎が、食卓を投げつけたことぐらいで、愕然としたり、前途に不安を感じるのは、いかにも、軽軽しい。こんなこと、ひとに言えるものか。それは万佐子の妻としての自尊心を傷つける。

だが、どうしても、徳四郎のそばへ行く気がしない。しかし、鍵をかけておくのは、あまりに相手に無礼であろうか。万佐子は、考えたあげ句、そっと、鍵をまわした。

それからそのまま、寝台にはいって、そっと横になった。その晩はじめて、ふたりは、上と下の部屋にわかれて寝た。

朝早く眼覚めると、万佐子は、下へ降りた。明け放したままの庭に、昨夜の膳部が、散乱していたが、座敷は、掃いてある。

「とくしろさん、」

奥の部屋に行ってみると、徳四郎は、ちゃんと客蒲団を出して、まっ白なシイツをかけて、縞ネルのパジャマを着て、ぐっすり寝こんでいた。

万佐子は棒立ちになって、その寝姿を見下した。そのうちに、よくもよくも、新しいまっ白なシイツまでかけて平然と寝られたものだ、ひとを恐怖のどん底におとし入れて、なんという悪にんだろう、こんなひと、好人物なんて嘘よ……だんだん怒りがこみあげて、蒲団の端を、恐わ恐わ、ちょっと蹴とばして、部屋を出た。

これこれでございと、なまじ訴え出ても、ひとの先入観というものは度し難いもので、みんながみんな、二十七年間も徳四郎は坊っちゃんでいいひとと思っている人物であり、全然、それらのみんなに関係のないところから嫁に来た女が、二年やそこいらで、それは違います、癇癪もちで、乱暴で、圖太くてと、先入観をくつがえそうとすること自体が、無理である。

万佐子は、半ば絶望して、庭の跡片付をしはじめた。朝日がきらきらと、硝子の破片に輝き、

小砂利のなかにぴかりと光る。綺麗だなあ、万佐子は、どうしてこういう状態になったのかさえも忘れて、フランスのワインカップだと、徳四郎が自慢していたものの破片を、小砂利のなかに埋めた。

あたしなら、こんな大事なものを見境もなく、投げ捨てられるであろうか、やっぱり、とくしろは、みんなが言う通りの、気前のいい寛容なひとなのであろうか。——万佐子は、後年、この時のことを鮮かに思い出す。どんな大事なものでも、人間は、或る瞬間には、ぱっとかなぐり捨てられる。それは我慢や忍耐ではなく、エネルギイの一種で、理屈や理由を超えた情念ではなかろうかと、気がついた。

……万佐子は、朝日に向って、ふうっと呼吸をした。なにか胸の片方の奥に、冷たいものが浸み込むような痛さを覚えて、乳の下を抑えながら廊下にうずくまった。

食堂の装飾燈の下から、降って湧いたように、一匹の蜘蛛がするするすると滑ってきて、白麻のテーブルクロスの上を横切った。

しかも今夜の中心人物である、大きい姉さまと一族のなかで呼ばれている、由井夫人の躰の蔭にはいったと言うので、ちょっとした騒ぎになった。気づいた給仕のお喜久がナフキンで拂おうとした時に、蜘蛛は大きい姉さまの薩摩上布の膝の上に落ちた。まっ白な綿で出来ているような、ふわふわの小さな手でぽんとはじき落され、三つ離れた椅子で、手を休めずに燕の巣をすすって

いた、異母弟の徳四郎の靴で踏みつぶされた。それから次の皿が待っていたように運ばれて、食卓の話のつづきが繰り返された。

天井の二方で、電気扇がゆるやかに廻り、食堂の三方は庭に面した網戸になっているのだが、肥り肉の大きい姉さまの鼻のまわりは、汗の粒でふくらんで見えるほどであった。手巾で手早く顔が撫ぜられ、その度に、甘美な柔かい匂いが空気に混る。万佐子は、向う側から、由井夫人の容姿が、二年前に初めて披露宴の席で會ったときとは、だいぶ面変りされているのに気づき、だぶついた二重顎の下の首すじだけが、絹を張ったように白いのを見つめていた。

万佐子は、ひと眼で、徳四郎との縁談がまとまってから、時折、家族といっしょの食事に招ばれた。それは外見ばかりでなく、内面をも試されているような気もしたが、いわゆる名門と称されて通る経歴をもつ連中にくらべて、旧家でも、昔日の俤もなく、破産して親戚の持家に住んでいる娘の上にそそがれている好奇心を、弾き返すような気で應じた。料理も出来ません、茶も花も、型通りの稽古をしただけです、と、万佐子は、自分からわざと言った。そんなことは、家庭をもてば、必然的にやらなければならないことで、花嫁だけの修業ではない、これからもやることで、充分でないとしても恥とは思わないのである。

徳四郎の母は、万佐子の言葉にうなずいた。

「そうですとも、出来ないことは、なんでも私に、また、婆やに言って頂戴、決して遠慮なさることはありませんよ、」

万佐子は、母は自分を好いていてくれると信じた。徳四郎は、婚約指環のサイズを計る為に、

母の指環を万佐子の指にはめさせた。
「この位かな、ゆるくない？」
「はい、」
万佐子は細い手の指環を抜こうとした。それよりも指環は細く、仲仲抜けない、指が赤くなった。徳四郎が、そばでしゃぼんを泡立て、そっと万佐子の指を泡で握りこすると、するっと指環は落ちた。——
向い側にいる由井夫人の指環がゆるいことに気づいた万佐子は、曾つて、自分の指から、仲仲指環が抜けなかったことを思い出したのである。
中華料理の性質上、食堂のなかの脂ぎった食慾を掻きたてるような雰囲気に満たされて、「大きい姉さま」は、大きいと特に名づけられるほど、体格そのものは大きくはなく、むしろ小柄なのだが、異母兄弟から、「大きい」と通称をつけられる、何か人間的な大きさのある人柄にみえる。汗を拭く度に、手巾をもった右手の指環の宝石が、見えたり見えなかったりした。指環がゆるくて、ぐるぐる動くからだと、万佐子は気づいていた。それで一層、無遠慮なまでに、由井夫人の一挙手に眼を止めているのであった。
丸顔で豊頬、大きな眼尻は下っているのだが、立派な鼻の為に愛くるしい威厳さえ湛えていた。白髪の混った豊かな髪を、ふっくらと束髪にしている。以前と、どこにも違った容子はないのだが、頽齢というよりも、なにかに蝕まれているような、皮膚のたるみに、万佐子は驚いているのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com